優秀賞　『新島八重と私の「共生」』　李　陽花

「男だから、女だから、外国人だから、という理由で自分自身と他人の価値を決めつけない」これは私が学んだ新島八重の人生において貫いた意志であり、志である。彼女が生きた江戸末期から明治時代。男尊女卑が当たり前の時代であった。しかし、そのような価値観にとらわれなかった彼女は差別のない平等な社会を信じていた。それは生まれた性別や出自、つまり女性や社会的マイノリティが差別されない社会である。私は在日コリアン４世というルーツを持って生まれてきた。いわゆる社会的マイノリティである。社会的マイノリティは、無知により異質なものとされ、基本的人権が無意識的に剥奪されることがある。「人の一面を享受し、支援する側、支援される側と分けるのではなく、共に生きていくうえでの一員として、適切な情報をもとに社会に繋げる役割をする」―これが私の志である。私も八重のように社会的マイノリティが差別されることのない社会を作ることを目指したいと心に決めている。

今日、日本では男女は平等とされている。社会的マイノリティへの差別も認められていない。しかし、依然として女性やマイノリティへのヘイトスピーチ、ヘイトクライムが多発している。八重の目指した社会はこうではない。「人の一面を享受し、支援する側、支援される側と分けるのではなく、共に生きていくうえでの一員として、適切な情報をもとに社会に繋げる役割をする」ために高校生の今、何ができるのか―そう考え、日々取り組んでいる。平和大使、外国人食堂、ヤングケアラー問題、ウトロ地区でのフィールドワーク…私の取り組んでいる活動は様々ある。今、私が皆で共に生きていくためにできることは何か。巨大化する台風やゲリラ豪雨、近い将来必ず起こるとされている南海トラフ地震…戦争の恐怖よりも災害による被害のほうがより身近であることに気づいた。そして、特に情報弱者である在留外国人のために避難所など災害時に必要な情報を共有することの必要性に気づいた。そして、「外国人向け防災パンフレット」を大阪市住吉区と共同で作成した。中村広美大阪府議会議員と会い、在留外国人も共に生きていく一員として、彼らと地域社会を繋げる役割をしたいという志を伝えた。そして、１年半以上かけて、私がリーダーとなり住吉区地域課と連携して、約 20 名の高校生でパンフレットをつくりあげた。現在は住吉区役所などで配布を行っている。同時に外国人向けの避難訓練を複数回実施している。これからは住吉区の地域の人とそこに住む約 5000 人の外国人をつなげていきたいと考えている。

人種や身体の特徴、感じ方や考え方、そして得意、不得意、　これらがみな異なるからこそ、私たちは互いに助け合うことができるのだ。そして、結果として皆が繁栄を享受することができるのだ。「人の一面を享受し、支援する側、支援される側と分けるのではなく、共に生きていくうえでの一員として、適切な情報をもとに社会に繋げる役割をする」ことのできる社会福祉士にわたしはなる。そのような社会がくることを信じ、八重は生きぬいた。私も八重のようにありたいと強く心に決めている。